方向

第九二号　一九八八年一二月一日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

若林芳樹随筆集『奥熊野』

1988.11.23. 原田憲雄

著者わかばやし・よしき氏は一九〇六年和歌山県新宮市に生れ、宮崎、鹿児島、和歌山各県の旧制中学、新制高校の国語科教諭・校長と五一年間教職に励み、現在新宮市神倉三－三－一二に住み、文芸雑誌『燔祭』を主宰、歌人として『創作』同人、俳人として『春燈』会員。新宮文化協会理事として『新宮市史』、日本基督教会員として『新宮教会百年史』の編集に携わり、先考の漢詩集『欽堂詩鈔』を編訳し、「明治時代新宮で発行された雑誌」や「麝洞湯川民太郎」のような地方史研究があり、歌集『朝の光』『野の花』、句集『虹』がある。『燔祭』は、一九七三年創刊し、毎号、表紙裏に「文章は経国の大業にして不朽の盛事なり。年寿は時ありて尽き、栄楽はその身に止まる。二者、必全の常期あり。未だ文章の無窮なるにしかず」という魏の文帝のことばを掲げ、歌俳詩文のほか漢詩も掲載する、今の日本では珍しい、総合的な雑誌である。『奥熊野』は、創刊以来一五年、三三号までの作品を自選し、随筆が主だが、童話、民話、詩もふくまれる。

巻頭の「猫とくろ竹」は医師であった祖父懸泉堂（白樹氏）にまつわる四話で、「まんかん」は猫の名。

くど（かまど）から降りて、茶の間に坐っている祖父の所に寄って来たまんかんの頭を撫でた祖父が、

「尾振れ！」

というと、長い尾を振り動かした。祖父は猫にそのように躾けていたのである。祖父が続けて、

「尾振んな！」（尾を振らないで！）

というと、まんかんは、ますます盛んに尾を振り立てた。

祖父の猫の躾けは、まだ完了していなかったのだろう。しかしその後もまんかんは祖父の禁止の号令は聞きわけるようにはならなかったようである。「尾振んな！」は、まんかんには「激しく振れ」としか理解できなかったのである。

このたくまぬヒューモアが、本書の基調で、それはまたあついヒューマニズムとなる。戦時中の学校配属将校とのいきさつを語る「コスモスで描いた文字」の終りにちかい、

考えてみると、私が少佐と意見を異にしたのは、掲示のことについてばかりであった。あの大柄で一本気な横河少佐は、戦場でも、ただ一すじに自己の信念を貫き御国のために、皇国の不滅を信じ、男子の本懐と思って戦死した。死して護国の鬼となったのだ……　合掌瞑目する私の脳裏に少佐と相かかわった思い出が駈けめぐり、今はただ少佐への友情に似た思いと痛惜の念がわいて来た。

の一節は、そのひとつの例としうるだろう。

「無縫堂召天」は、友人で『儀礼釈攷』の著者川原寿市氏の死を描く。氏は生前何の宗教も信ぜず「わしが死んだら、焼いて灰を山の上からまけ。葬式はするな」といっていた。家族は故人の遺志は尊重したいと思ったが、実行するのは難しく、思い余った夫人は、平生門前は通るが中に入ったことのない修道院にゆき相談すると、異国の神父は「これは神様の思召しです」といって、洗礼を授け、カトリックの葬式をし、教会の墓地に葬った。

その数カ月後に友の死を知った若林氏は墓参する。「川原君の墓は、中段の中央にあった。その隣はモルガンお雪の墓である。／山では、うぐいすがしきりに啼いて、五月の末の太陽は汗ばむ程である。」

儒学者であって、無宗教者の君が受洗して基督者として召天したということは、平常の君に何だか相応しくない。儀礼学者として小島祐馬先生から推賞された君は、できることならば近江の安曇町の藤樹書院とか東京の湯島聖堂のような所で儒者としての葬儀をする方が、相応しい。

しかし、君は「無縫堂」の号が示すように、天衣無縫の人柄であったから、人の意表をついて急に受洗、召天して、自由無礙の心境を表したのかも知れない。

この一文は『世説新語』のようにくっきりと、王維の詩のようにひびきがふかい。

私のレモン号・その後

六八・一・二三　　原田道子

私の自転車、レモン号が空を飛んでから七年たちました。あれからレモン号は一度も飛ぶことはなく、ごく普通の自転車の顔をして過ごしてきました。しかしある日、お母さんが私にこう言ったのでした。

「ねえ、そろそろあんたの自転車、買い替えたほうがいいんじゃないの？　この間お母さん、あんたの自転車借りたんだけどね、こぐとギイギイ音がするし、とってもこぎにくかったんだけど。もうずいぶん古いから、あんなのにあんたが乗っているのは心配だし。」

そうは言われても言われた本人は、ふんふん、物を買ってもらうには親が見かねるまで古いのを使い続けることだなーなどと思いながら聞き流していたのですが、よく考えると、新しい自転車を買ってもらえば、必然的に古いのは捨てなくてはなりません。

「あの、やっぱり新しい自転車買ったら、古いの捨てなくちゃいけないよねえ？」

「何いってんの、当り前でしょうが。古いのなんて、あったって乗らないのに置いといてどうするの。」

結局、今度の土曜日に新しい自転車を買いに行くことになってしまいました。確かに私は、車輪が小さくて、こぎにくい自転車より、新しいのが欲しいなあと思っていたのですが、レモン号を捨ててしまうとなると、手放しで喜ぶこともできません。何といっても空を飛んだ自転車ですもの。それに、これは七年間、かなり荒っぽく使ってきたけれど、一度も壊れたことはなかったし、タイヤもパンクしたことはないのです。こんなけなげな自転車を古くなったからといって簡単に捨ててしまうのは可哀相でなりません。どうしようかと迷っているうちに木曜日になってしまいました。お母さんはすっかり買い替えるつもりになっています。

「ほんとに、どうしようかなあ。汚れてはいるけど、故障一つ無いんだよねえ……ちょっとブレーキが甘くなってるけどそれだって大したことないしなあ。」

さて、木曜日は塾があるので、早めに夕御飯を食べて、家を出ました。古い自転車に乗って。ギイーッ、ギイーッ、とこぐたびに大きな音がします。

「やっぱりそろそろ替えなきゃいけないかなあ。でもなあ……」

私もさすがにちょっとこの音は危険信号かな、と思い始めました。

塾が終わるともう九時で、車通りもまばらでしたので、私はのんびりとレモン号のペダルを踏み始めていました。これ、やっぱりスクラップかな、まるでこいつの悲鳴が聞こえてくるようで嫌だな。そうそう、高校に入って初めてみた演劇が『レモン』っていって、それを見た後この自転車がますます気に入ったんだっけ。なんて思いながら。そしてハッと気が付いたとき、まん前にけたたましいクラクションを聞いたのでした。

ふつかる！　慌ててハンドルをきりましたが間に合いません。どうしようっ！

意識が戻ったとき、自動車ははるか向うにいってしまっていました。私はただひたすらペダルをこいでいました。私が見ていたのは、いつか見た景色でした。レモン号は、ふたたび空を飛んだのでした。

土曜日。私はお母さんと自転車屋さんに来ていました。レモン号はどうしたと思いますか？

あの後、家に帰りつくと、ピンとネジが一つはずれたと思うとガシャ、とハンドルが落ち、タイヤが擦り切れてパンクしてしまいました。昔ならともかく、今のレモン号の老骨には急な飛行は無茶だったようです。私はそっとこの愛車に御礼を言って、働き者の跡形を片付けました。だから、いま手許にあるのは例の最初にはずれたネジだけです。そして新しく、白い26インチの自転車を買いました。これもレモン号のように頑張ってくれるといいのですが。

鼻曲りのネズミ

1988.11.18　原田　慶

「今のネズミはやっぱり野性を失っとるで、あんな所に閉じ込められて、食べる物が何もないんやさかい、飢え死にするのにきまってるんや、昔のネズミならそんなことになったらどこでも逃げる道をさがして、ちょっとぐらい危なくても飛び出していったやろ、それがあのネズミは、入った所から出んならんとおもて、ぼくが閉じた穴の所を、一生懸命かじっとるんや、せっかく出て行くようにと一日中、天井板を開けて戸もあけて、外へ出られるようにしてやってるのにまだ出とらへんがな、ゆうべもカリカリカリカリいわしとるんや、もうほんまに尻曲りと鼻曲りとへそ曲りばっかりで」

朝食をすまして立ち上がる時に、主人はよほどうんざりしたとみえて、めずらしくぶつぶつ言っている。

「えっ誰が尻曲りですか」

「知らん」

怒って行ってしまった。

雨の多かった夏はシロヒトリの大群のほかに、九月の末頃からネズミが天井裏へ遊びに来るということにもなった。わたしが、毛虫毛虫、ネズミネズミというので、主人は毎日、屋根にあがったり天井裏を歩きまわったりして忙しい、わたしもできるだけのことはしていたが、天井の中へは入ったことがない。

夜になると、台所の上あたりの天井裏へ、ドッテン、ドドドドドと音をたてておどり込んでくる。ふつうのネ

ズミの音とは思えない。あまりにも重たそうな音で、頭の上を走りまわる。二十年以上もまえにネズミがいたことがあって、天井裏で蛇がおいかける音がしていた。それ以来ネズミが入ってきたことはなかったし、蛇もいなくなったので、天井にものの走る音を聞いたことがなかった。主人が天井裏にはいってしらべてみたが、ネズミの巣は無いから、やはり夜になると遊びに来るのだろうという。

雨が多くて、外を走りまわれないから、天井へ来るのだろうか、たぶんドブネズミだろう。頭の上でドタドタ音をたてられるのはたまらない。

ネズミは大変に繁殖力がつよい、一年に数回こどもを産む。ドブネズミの一種で天井などに入ってくることの多いクマネズミは、一回に平均六から七匹、ときには二十匹ちかくも産むという。そのこどもは五十日もするとおとなになって、またこどもを産む。ネズミの数は日本では、人口の二倍はいると考えられるそうである。一日一匹、十グラムの米に相当するものを食べるということである。薬のついた米粒のような餌を買ってきて、ちり紙に包んで天井裏においてみたが、ネズミは見向きもしなかった。外にいくらでもおいしい食べ物があるから、毒餌など知らぬ顔で、ただ走りまわっているのだろう。主人は棒を持ってきて、コンコン、コンコンと天井をたたいてネズミを追う。しばらくひっそりしているが、また走りだす。わたしは思いっきりバンバンたたく。こっちが腹をたてていることがわかるのか、ネズミはその夜だけ音をたてない。

あちらこちらしらべてみたが、台所を改造した時に破った壁がそのままになっていることがわかったので、金網をはって閉じた。しかしその夜もネズミは入ってきた、つぎの日もう一度しらべてみると、まだ小さな穴が二

つほどある。それを閉じてもういいかと思ったら、ほっとしたのもつかのま、三日ほどするとまた入ってきた。もう一度そのあたりをしらべて、瓦まではがして土をいれなおし、ほかのところも少しでも隙間のあるところは閉じた。これでもきたらよっぽどかしこいネズミだと言っていたのに、どうしたことだろう、ネズミのこそこそと走る音がする。さすがに主人も不機嫌になってきた。

「毛虫毛虫、ネズミネズミというけど、あんたもいっぺんアノラックを着て、天井へあがってそこらをよう見てきなさい」と腹立たしげに言う。

「べつにネズミが来るのはあなたのせいやとはいうてへんでしょ、来たから来たというてるだけです、もう来てもいいません、わたしもできるだけのことはしてるんですけどね」

毛虫やネズミのために、なんで喧嘩をせんならんのか、よしそれなら今度はわたしが天井裏にはいって、掃除機で徹底的にきれいにして、なにかネズミのいやがる薬をまいてやろう、忍者みたいでちょっと面白いと考えた。

翌日そのことをいうと、

「何をいうてるんや、天井板なんてうすいうすいもので、どこを歩いてもいいというものとちがうんやで、ぼくは昔から何度も上がっていて、この寺のことは隅から隅まで知ってるさかい、天井を踏み抜かんようにあるいてるけどやな、あんたみたいになにも知らんと歩き回ったら、いっぺんに踏み抜いて落ちてしまうがな」

主人はあきれかえっていたが、それでもすぐに作業着に替えてきて、わたしに天井裏を見せてくれた。なるほど天井板はうすくて、とても掃除機をかついで歩けるような所ではない。部屋の仕切りの上か長い板の渡してあ

るところを歩けばよいが、そこからはずれたりころんだりすると、天井が破れる。本堂の内陣の上だけは、厚い壁の天井になっていて他のところとはちがう。面白そうだが歩くのは遠慮した。書院の方の天井裏も見せてもらってわたしが降りると、主人が代って天井へ入って行った。しばらく下に立って足音を聞いていると、隣の部屋の上でアッと声がしてバリッという音がした。尻もちをついて天井板を破ってしまったのである。

「板は折れたけど落ちなくてよかったですね、折れたのは一枚だけですから下から押せばなおるかもしれませんよ」

と言ったが、降りてきた主人は天井を見上げて、

「折れたとこはなおらんなあ、いっそうのことここを切って穴をあけてしまおうか、ネズミが走ってきたらここから頭を出してコラッていうたらネズミがびっくりしよるがな」

わたしのほうがびっくりした。書院のほうは建って二十五年ほどだから、まだいくらかは木も白い。そんなところの天井を切って穴をあけるなんてもったいない。まさかと思ったが、主人はさっさとそこを切って、自分が天井へ出入りできるだけの穴をつくってしまった。

書院の工事をした時に、本堂との間の壁を破って、大きな穴が一つあいていた。外へ向かっていないのでネズミが直接入ってくることはないが、台所の方から本堂をとうり抜けて、奥まで入り込んでくる。主人は、大工さんもこんなとこぐらい板一枚はっておいてくれたらいいのに、後からするのは大変やと言いながら、天井にあがって金網を張った。天井を切ったところには、べつの板を持ってきてのせた。その夜のことである、ネズミが一

四、書院の天井に隠れていたらしくて、ふさいだばかりの穴の辺りをカリカリとかじり出したのは。

翌朝になって、自分がつくつた穴から首を入れてのぞいていた主人は、たしかに生き物がじっと息をころしてひそんでいる気配がする、そういう空気のなんともいえない不思議な感じは、なぜかわかるものだという。その日は天井とガラス戸を開けて、ネズミが出て行けるようにしてあった。しかし夜になると、相変わらずネズミは同じところをかじっているのである。尻曲り、鼻曲り、へそ曲りは誰のことか知らないが、まずネズミを追い出す方法を考えなければならない。

書院の天井へ入るのには、押入の上のせまい戸棚の天井板がはずれるようになっている。人間が出入りするのには、からだを折曲げて辷りこむようにしなければならない。新しくつくった穴より奥にあるから、そちらからバルサンをたいたら、たまらなくなって飛び出すのではないだろうか、と考えた。さっそく押入の上で煙を出して、ネズミ追い出し作戦を開始。一度で出なかったらまたけむらしてやろうと思って、バルサンを三缶、買ってきておいた。あの鼻曲りが一度くらいで出て行くとは思えない。

ネズミは、わたしたちには子どものころからおなじみで、おむすびころりん、ネズミの嫁入り、小判のむしぼしなどと、かしこくて勤勉で元気者というイメージがある。しかしじっさいには赤ん坊の鼻をかじったり、電気のコードをかじったり木の根をかじって枯らしてしまったり、あまりいいことはしてくれない。ネズミは根の堅洲国にすむからネズミと呼んだというのは面白い。ネズミが人間に財宝をもたらすというのは、昔にそのようなことがあったのだろうか。

バルサンのけむりは、一回でみごとにネズミを追い出したらしい。あの夜から十一月にはいってからも、ずっとネズミの音を聞かない。「よっぽどこりたんやろうなあ」と主人もほっと一息ついている。毛虫も生き残ったものは、どこかにもぐりこんで眠ってしまった。さあみんなしばらく静かにしていておくれ、枯草を刈り取って落葉を燃やして、庭がからっと明るくなったら、わたしたちも少しの間、冬眠したいから。

※第九〇号正誤　一頁三行　幕を張り→幕をまわし（上原淳道氏示教）　七頁七行　思ええない→思えない
一〇頁三行　わたしのの家→わたしの家

巧みな方便　―法華経巡礼２４―

1988.11.24.　原田憲雄

1-51.　これらの仏の系列の、日月燈明は、最後であって、
「諸天の天」と聖者の群から供養され、教化した、幾千万の衆生たちを。（８９）
スガタの子孫の妙光が法を説いたが、そのときに、
弟子がいた、怠け者で、貪欲で、利徳と評判を渇望した。（９０）
名声欲の度が過ぎて、貴族、豪家をめぐりあるき、
受けた教えも、復習も、いつもかれには何ひとつ残らなかった。（９１）
だからそのまま求名（ぐみょう）とよばれ、あだ名は、諸方に有名だった。

このような汚点はあったが、善業を積むことにより、（９２）
幾千万億の仏たちを喜ばせ、広大な供養をささげ、
従順に、選びぬかれた修行をし、シャカ族の獅子の仏に会った。（９３）
ここに最後に生れる時は、もっともすぐれた無上道を手に入れて、
マイトレーヤ族の世尊となり、教化するだろう、幾千万億の衆生たちを。（９４）
涅槃せられたスガタの教えを受けながら、怠け者であった、
きみこそ、まさにその人であり、わたしはその時の説法者。（９５）
このようなわけ、この因縁で、いまこのような前兆を見て、
わたしはいう「これは示された智慧の前兆、初めにあそこで見たもの」と。（９６）
ジナの王、普遍の眼をもつ、シャカ族の王、第一の真理を見た人もまた、
確かに説こうとしているのだ、最勝の法門、さきにわたしが聞いたものを。（９７）
前兆が、今日このように出揃ったのは、指導者たちのまさに巧みな方便で、
シャカ族の獅子なる人は活用し、説くだろう、法の自性の特色を。（９８）
うやうやしく心を正して合掌せよ、世間を愛するあの人は説き、
無量の法の雨降らせ、満足させよう、覚りに向かう人々を。（９９）
何か分からぬことがあり、疑い、ためらいがあろうとも、

除かれよう、賢者は、その子、悟りへとここに旅立つボサツのために。（１００）

以上が、聖なる「妙法蓮華」という法門の序品第１。

teṣāṃ ca buddhāna paraṃpareṇa dipaṃkaraḥ paścimako abhuṣi /
devātidevo ṛṣi-saṃgha-pūjito vinītavān prāṇi-sahasra-koṭyaḥ //89//
yaś cāsi tasya sugatātmajasya varaprabhasya tada dharma bhaṣataḥ /
śiṣyaḥ kusīdaś ca sa lolupātmā lābhaṃ ca jñātaṃ ca gaveṣamāṇaḥ //90//
yaśo 'rthikaś cāpy atimātra āsīt kuḷa kuḷaṃ ca pratipanna āsīt /
uddeśa-svādhyāyu tathāsya sarvo na tiṣṭhate bhāṣitu tasmi kāle //91//
nāmaṃ ca tasya imaṃ evaṃ āsīd yaśakāma-nāmnā diśatāsu viśrutaḥ /
sa cāpi tenā kuśalena karmaṇa kalmāṣa-bhūtena bhisaṃskṛtena //92//
ārāgayi buddha-sahasra-koṭyaḥ pūjāṃ ca teṣāṃ vipulāṃ akārṣīt /
cīrṇā ca caryā vara ānulomikī dṛṣṭaś ca buddho ayu śākyasiṃhaḥ //93//
ayaṃ ca so paścimako bhaviṣyati anuttarāṃ lapsyati cāgrabodhim /
maitreyagotro bhagavān bhaviṣyati vineṣyati prāṇa-sahasra-koṭyaḥ //94//
kausīdya-prāptas tada yo babhuva pariniṛvṛtasya sugatasya śāsane /
tvaṃ eva so tādṛśako babhuva ahaṃ ca āsīt tada dharmabhāṇakaḥ //95//

imena haṃ kāraṇa-hetunādya dṛṣṭvā nimittam idaṃ evarūpam /
jñānasya tasya prathitaṃ nimittaṃ prathamaṃ mayā tatra vadāmi dṛṣṭam //96//
dhruvaṃ jinendro 'pi samanta-cakṣuḥ śākyādhirājaḥ paramārtha-darśī /
tam eva yaṃ icchati bhāṣaṇāya paryāyam agraṃ tada yaṃ mayā śrutam //97//
tad eva paripūrṇa nimittam adya upāyakauśalya vināyakānām /
saṃsthāpanaṃ kurvati śākyasiṃho bhāṣiṃyate dharmasvabhāvamudrām //98//
prayatā sucittā bhavathā kṛtāñjalī bhāṣiṣyate loka-hitānukampī /
varṣiṣyate dharmam ananta-varṣam tarpiṣyate ye sthita bodhi-hetoḥ //99//
yeṣāṃ ca saṃdeha-gatiha kācid ye saṃśayā yā vicikitsa kācit /
vyapaneṣyate tā vidur ātmajānāṃ ye bodhisattvā iha bodhi-prasthitāḥ //100//
ity ārya-saddharmapuṇḍarike dharmaparyāye nidānaparivarto nāma pratamaḥ //

「シャカ族の獅子」「シャカ族の王」は、釈尊の呼び名のひとつ。ここはほぼ先に散文で説かれたものと同じだけれども、新しく出てきた言葉で、しかもたいへん重要なものがある。それは（９８）に見える「巧みな方便」upāyakauśalya である。upāya は方便、kauśalyaは巧みな、熟練した、の意。

upāya は、動詞 i（行く、来る、到達する）に、接近を示す接頭語upa をそえ、名詞化した語で、「接近、到着、手段、方策、工夫、策略、技巧」などの訳語が当てられ、漢訳仏典では「方便、巧便、権方便、因縁方便」

などとされ、『法華経』では「方便」とされ、第二品（章）の名となっている重要なキーワードである。なお、upāyakauśalya も「善巧方便」（ぜんぎょうほうべん）とされることが多く、通仏教的、すなわち仏教全体におけるキーワードである。

「方便」について中村辞典は「すぐれた教化方法。真実の世界へ導くてだて。衆生利益のための手段。差別の事象を知って衆生を済度する智慧。真実の教えに導くために仮に設けた法門のこと。他をしてきとらしめるための手段」などと解説し、先に掲げた漢訳仏典の訳語の説明としても受け取れる。さらに立ち入ったことについては次章にはいってから考える方がよい。ここでは「巧みな方便」が、指導者たち、すなわち前世の仏たちに共通し、「前兆」とかかわり、釈尊のこれからの説法もおなじ方便によって「法の自性の特色」すなわち諸法実相が、あきらかにされようとしているのだ、ということに注意しておけばよいだろう。

以上が聖なる「妙法蓮華」という法門の序品第一。このように、品（章）の終りに品名を掲げるのが梵文経典の習わしだが、漢訳経典は初めに掲げ、朝鮮、日本は漢訳に従った。

次は正本で「善権品第二」、妙本で「方便品第二」という章である。

2.0. 巧みな方便と名づける第二

これも梵本では品の終りにあるが、底本で、校訂者が便宜上、初めにもおいた。

2.1. そのとき世尊は、想い起こし、自覚し、そこで三昧から立ち上がった。立ち上がって、長老シャーリプト

ラに語りかけた――

深遠で、見がたく、知りがたいのだ、シャーリプトラよ、如来、尊敬されるべき、正しく覚った人の得た仏の智慧は。すべての声聞、独覚には知りがたい。それはなぜかというと、幾千万億という多くの仏たちに親しく仕え、シャーリプトラよ、如来、尊敬されるべき、正しく覚った人は、幾千万億の諸仏の修めた行を修行し、最上の正しい覚りに深く入り、精進し、不思議で未曾有の法を身に付け、知りがたい法に通じていたからだ。

atha khalu bhagavān smṛtimān samprajānas tataḥ samādher vyutthito vyutthāyāyuṣmantaṃ śāriputram āmantrayate sma / gambhīraṃ śāriputra durdṛśaṃ duranubodhaṃ buddhajñānaṃ tathāgatair arhadbhiḥ samyaksambuddhaiḥ pratibuddhaṃ durvijñeyaṃ sarva-śrāvaka-pratyeka-buddhaiḥ / tat kasya hetoḥ / bahu-buddha-koṭi-nayuta-śata-sahasra-paryupāsitavino hi śāriputra tathāgatā arhantaḥ samyaksambuddhā bahu-buddha-koṭi-nayuta-śata-sahasra-cīrṇa-caritavino 'nuttarāyāṃ samyaksambodhau dūrānugataḥ kṛta-vīryā āścaryādbhutadharma-samanvāgatā durvijñeyadharmānujñātāvinaḥ //

世尊が想い起こした、とは、何を想い起こしたのであろうか。前世のことである。前世のことにもいろいろあろうが、そのいずれなのか。「序品」での弥勒と文殊の問答は、釈尊が三昧に入っている間に行なわれた。その三昧の内における想起の内容が、弥勒と文殊の問答として「序品」で表現されていたのだ。

想起の原語 smṛ は、心にとどめると言う意味の動詞で、外部から心に取り込む記憶と、心から外部へ呼び出す想起の両面をもつ。梵語の動詞、ことによく使われる動詞は、この両面を持つことが多く、さきに「方便」の説明にもあった動詞 i が、「行く」と「来る」との両義をもち、如来(tathāgata)の gata は gam の変化形で、これもまた「行く」と「来る」の両義があり、従って tathāgata は、正確には「如来如去」で、便宜的に「如来」だけが通用しているのであること、さきに説いた通りである。多くの動詞が両義を含むのは、インド人の一般が運動を両面において捉える傾向を持つということである。「君は行くだろう」という意味を「君は〈行く者〉」というように、運動を静止的に捉える傾向と矛盾するような気もするが、静止的に眺めるために、運動にも二面あることが早くから見取られていたのだろう。

「自覚し」の原語 samprajāna は、「知る」という意の jñā に、接頭語 sam(集合) pra(前進、充実) の加わった語で、ここでは記憶をくまなく検討したということになるだろう。正本、妙本ともに、この二語にあたる訳文がないのは、「序品」の叙述によって既に想起、自覚が十分表現されているとみて、重複を避けたのだろうか。

そこで釈尊は三昧から立ち上がる。三昧は覚りの境域である。そこから迷う人間の世界にでてきて迷悟の堺に立つ弟子シャーリプトラに語りかける。ここから実質的な『法華経』の説法に入る。三昧中の想起場面での対話者が弥勒と文殊というボサツ〈神話的人物〉であるのに対し、シャーリプトラが〈歴史的人物〉であることに注意しておこう。

「深遠で、見がたく、知りがたいのだ」これが、発せられた最初の言葉だった。見がたく、知りがたいことは、

見ても見えず、聞いても分からない、ということだから、きみたちは見るのも聞くのも無駄だ、という聴聞への拒否にひとしい。にもかかわらず釈尊がすでに語り始めているのはなぜか。説法は初めから矛盾に満ち、わかりにくい。

「深遠」と訳した gambhīra は「底知れない、深い、濃密な、透らない、無尽蔵の、神秘的、聡明な」などの意をもつが、gabhあるいは gambhなる動詞に由来し、「裂ける、裂け開く」の意である。だから、深く底知れないにしても、閉じられているのではなく、裂け目ができている。同じ動詞から出た gabhasti が「腕、手」の意とともに「光線」の意の名詞、「輝く」の意の形容詞として使われるのは、手で開くことによって光が漏れ出ることを示す。見がたく(durdṛśa)知りがたい(duranubodha)の dur も動詞 du にもとづき「燃える、苦しめる」の意で、苦しみ悩ませはするが、見ること、学ぶことを、まったく不可能にするのではない。そのようなものが、如来〈真如と迷妄のあいだを行き来する人〉尊敬されるべき〈アラカン〉正しく覚った人の得た「仏の智慧」なのである。まったく不可能とするのではないが、「すべての声聞、独覚には知りがたい」。この「知りがたい」も durvijñeya で難しくはあるが、まったく不可能なのではない。しかし正本は「不可及知」妙本は「所不能知」とする。杓子定規にいえば正確ではないが、インドと中国の修辞観の違いを計算に入れれば、これで差し支えはなくむしろここでの全称否定が、後の肯定をドラマティックに強調することになるのであろう。

「仏の智慧」が声聞、独覚に知りがたいのは、なぜかというと、その「智慧」の主である仏が、幾千万億の過去の仏たちに仕え、その仏たちが修めた行を修行し、精進することよって到達した智慧だから、という。

声聞は、仏の弟子で、教えに従って修行し、やがては汚れを捨てて尊敬されるべきアラカンとなる。独覚も独力で悟りを開いた人で、プラティエーカ・ブッダというように、覚った人の一種に違いはない。しかし教えられて、教えに忠実であるというだけでは、教えのすべてには到達せず、どこかに漏れがあるものであろう。ひとりで覚っただけのものは、多くの人々の検証を経たもののように周到でないのが常である。「仏の智慧」はそれらとは時間・空間の両面に隔絶している。だから見がたく、知りがたいのだ。ほとんど神秘的ではあるが、しかし仏は、キリスト教の神とは全く違う。仏は、人間であって、世界の創造者ではない。つねに学び、学んだことを行為によって確かめ、現在の此処だけでなく、過去・現在・未来の、あらゆる空間への適応を検証し、その知識にもとづく人間のありかた体得し、これを衆生に示した人なのだ。普通の人からは隔絶しているようであっても、人間であることに違いはなく、隔絶したようなその境地も、修行という人間の行為の結果として実現されたものにすぎない、想像を絶するほどの困難な修行ではあるけれども。「仏の智慧」が、声聞、独覚に知りがたいのは、声聞、独覚の覚りが、現在の此処、に限られた狭いものであり、しかもそれに満足して、さらに広大な境地に目を向けようとしないからである。

2-2. 知りがたいのだ、シャーリプトラよ、多くの意味をこめて語られる、如来、尊敬されるべき、正しく覚った人々の言葉は。それはなぜかというと、みずから確信する法を、多種多様の巧みな方便と知見によって、解き明かすからである。すなわち、原因、作因、譬喩、想念、解釈、仮設によって。それは、それぞれに応じた巧みな方便で、あれこれに執着している衆生を解脱させるためなのだ。偉大で、巧みな、方便と知

見の最高の完成に到達しているのだ、シャーリプトラよ、如来、尊敬されるべき、正しく覚った人々は。執着も障碍もない知見、力、確信、特別の活力、覚りを助ける要素、禅定、解脱、平安という未曾有の法を具備し、種々の法を説き明かす。偉大で希有未曾有なものを得ているのだ、シャーリプトラよ、如来、尊敬されるべき、正しく覚った人々は。シャーリプトラよ、このように話す言葉で十分だ、シャーリプトラよ、如来、尊敬されるべき、正しく覚った人々は最高の希有なものを得たのだと。如来こそ、シャーリプトラよ、如来の法を説くだろう、如来の知るそれらの法を。すべての法を、シャーリプトラよ、如来こそが説き、すべての法を、如来こそが知るのだ。それらの法は何か、それらの法はどのようにあるのか、それらの法はどのように見えるのか、それらの法はどのような特質か、それらの法はどのような自性か。すなわち、それらの法が、何であり、如何にあり、いかに見え、いかなる特質、いかなる自性であるかという、これらの体系については、如来だけが、明らかに見極め、認めるのだ。

durvijñeyaṃ śāriputra saṃdhābhāṣyaṃ tathāgatānāṃ arhatāṃ samyaksaṃbuddhānāṃ/ tat kasya hetoḥ / svapratyayān dharmān prakāśayanti vividhopāyakauśalya-jñānadarśana hetu-karaṇa-nirdeśana-rambaṇa nirukti-prajñaptibhis tais tair upāsakauśalyais tasmiṃs tasmiṃl lagnān-sattvan pramocayitum / mahopāya-kauśalya-jñānadarśana-parama-pāramitā-praptāḥ śāriputra tathāgata arhantaḥ samyaksaṃbuddhāḥ/ asaṅgapratihata-jñānadarśana-bala-vaiśāradyavepikaendriya-bala-bodhiaṅga-dhyāna-vimokṣa-samādhi-samāpatty-adbhutadharma-samanvāgata vividha-dharma-samprakāśakāḥ/ mahāścaryad-

bhutaprāptāḥ śāriputra tathāgatā arhantaḥ samyaksaṃguddhāḥ/ alaṃ śāriputra etāvad eva bhāṣitaṃ bhavatu paramāścarya-prāptāḥ śāriputra tathāgatā arhantaḥ samyaksaṃbuddhāḥ/tathāgata eva śāri-putra tathāgatasya dharmaṃ deśayed yān dharmāms tathāgato jānāti / sarva-dharmān api śāriputra tathāgata eva deśayati / sarva-dharmān api tathāgata eva jānāti / ye ca te dharmā yatha ca te dharmā yādṛśāś ca te dharmā yai-lakṣaṇāś ca te dharmā yat-sva bhāvāś ca te dharmāḥ / ye ca ya-thā ca yādṛśāś ca yal-lakṣaṇāś ca yat svabhāvāś ca te dharma iti/ teṣu dharmeṣu tathāgata eva pratyakṣo eva 'parokṣaḥ //

「知りがたいのだ」と釈尊は言葉を継ぐ。こんどは仏の「言葉」が知りがたいというのである。知りがたい仏の智慧から溢れ出る言葉が知りがたいであろうことは当然だが、ここでは、その言葉に「多くの意味をこめて語られる」という説明がついている。その原語は saṃdhābhāṣyaで、saṃは「集合」を意味する接頭語。dhā は「上に加える」意の動詞、bhāṣyaは「言葉」である。方便説、秘密教、随宜説、密意語言などと漢訳されるが、つまりは多義性をもつ言葉、拙訳の「多くの意味をこめた言葉」である。

言葉は使用の過程で、その意味が拡大したり縮小したりする。簡単な「いぬ」にも、手許の辞書は「①イヌ科の哺乳動物　②回し者」の二義をあげる。使う者が二義を知り、それを合わせてアテコスリとしても、聞く者が②を知らないのでアテコスリが成立しない、といったことは平凡な日常生活にもよくある。そのような言葉の両義性、多義性が、今日あらたに論議されているようだが、仏の言葉は、広大な修行の結果が多様な意味としてこ

められているので、それだけの多様な意味を共有しない者には、知りがたいのである。

「知りがたき」は、しかし言葉の多義性にだけあるのではなく、知りがたい「仏の智慧」をなんとかして衆生に伝えようとする手段・方法の多様さにもある。それが「みずから確信する法を、多種多様の巧みな方便と知見によって、説き明かす」であろう。その方便と知見の主だつものを枚挙するのが、次の「原因、作因、譬喩、想念、解釈、仮設」である。六つについての訳語がこれで良いかどうか。「譬喩」としたものの原語 nirdeśana は「指示」だが、他の七テキストに nidarśana(譬喩)とし、妙本にもそうあるので、これに従った。しかし妙本はこの前後を「種々の因縁、種々の譬喩もて、広く言教を演べ、無数の方便もて、衆生を引導し、諸の著を離れしむ」とし、このうちのどれが梵文のそれぞれに当るのか、明瞭ではなく、正本も同様。新しい数種の翻訳本の訳語も一定しない。従って一々を正確に定義づけることができず、困るのだが、これはわたしの無知だけのせいではない。ヨーロッパの仏教学の大家たちも難儀しているようである。考えてみると、この六つは、方便・知見の主だつものとして枚挙したうちの六つにすぎない。細目はこれに尽きるわけではなく、またこのうちの二つか三つで代表させても差支えのない筋合いのものであろう。論理学の教科書ででもあるのなら、一々に厳密な定義が必要だが、ここで大切なのは、別のところにある。妙本は、大切なところを通すほうに力をこめ、どちらでもいいようなものは適当に省いたり加えたりした。「方便品」のこころは、殊に妙手の発揮されたところであるらしい。クマーラジーヴァは、単なる翻訳者、言語学者として訳しているのではなく、『法華経』方便品の行者として、「方便」を、この翻訳において、実践しているのだ。

さて、仏の「巧みな方便」は、あれこれに執着している衆生を解脱させる、すなわちその煩悩から解放するためという。数限りない衆生の極まりない煩悩に対応するには、限りなく多様な方法・手段がいるだろう。仏とは、そのような方法・手段をもつ人にかぶせた呼び名であり、だから如来、尊敬されるべき、正しく覚った人は「偉大で、巧みな、方便と知見の最高の完成」に到達していなければならない。「完成」の原語は pāramitā で、波羅蜜、波羅蜜多などと音写されるが、「満たす」「越える」の意をもつ動詞 pṛ に由来し、「彼岸に達すること、到彼岸、完全な成就、完成、度」などと訳される。

①布施　②持戒　③忍辱　④精進　⑤禅定　⑥智慧　の六つを六波羅蜜といい、これに⑦方便　⑧願　⑨力　⑩智　の四つを加えたものを十波羅蜜という。妙本が、「完成」ではなく「波羅蜜」を訳語として採用するのは、すでに中国人に知られていた徳目を、そこにこめうる便宜を幸いとしたのであろう。もっとも『法華経』自身、その直ぐ後に、「力、確信……解脱、平安」という方便・知見の要素を列挙する。これを「十力、四無所畏、十八不共法、五根、七覚支、四禅定、八解脱、八等至、三三昧」と整理する説もあるようである。もとよりそれらを含めてよく、しかしそこにとどまらないのが「巧みな方便」であろう。

このような言葉の、意味の分析や分類は、それだけで楽しく、また学問としても有益だ。ものを正確に見、正確に考えてゆくには、ことばの精密な使い分けが必要で、定義がおろそかなために折角の討論も無駄になることがはなはだ多い。アビダルマコーシャといった、微に入り細に入る分類哲学がビク教団に発達したのは、論議の経済から必然的に導き出されたのであった。真面目にものを考えようとしない人たちの間に、学問をばかにした

り、学者の回りくどさを笑ったりする風があるが、その学問や学者の恩恵を、努力もせずに受けていることは、その人たちに分かっていないのだ。

ではあるけれども、分析も分類も、衆生の煩悩からの解放が目的であって、分析や分類そのものが目的ではない、仏の方法・手段においては。哲学は、知的追求そのものが目的だといわれる。科学もまたそうなのかもしれない。追求の結果、戦争と自然破壊をすすめ、地球をぶっつぶし、生物を絶滅したら、知的追求も同時に絶滅する。知的追求は楽しく、有益に見えるから、その世界に入り込んだ者が、世界の外に世界を支える法則の働いていることを忘れがちなのも無理はない。忘れている人たちに、その法則を語っても、なかなか理解されない。かれらは自分たちの正しさを確信し、かれらの確信の外に真実があろうとは思えないので、なおさらである。

「シャーリプトラよ、このように話す言葉で十分だ」と、釈尊が言うのは、そこに集まり、聞いている人たちの多くが、いわばあの確信に満ちて、おのれの信じるところの外に法則のあろうことなど考える余地のなくなった人たちが多かったからである。

ここのところを妙本は「止みなん、舎利弗、また説くべからず」（質問するのはよしたまえ、シャーリプトラよ、説明しても仕方がない）と訳する。実に思い切ったやりかただが、後の偈に「やめよ」という言葉が出てくるから、それをここに迎えての翻訳なのだ。

「如来、尊敬されるべき、正しく覚った人々は最高の希有なものを得たのだ」と告げる、それだけで十分だとは、それ以上は話しても無駄だ、ということで、あとは、聞く者が信じるか、信じないか、しか残っていない。